私のスミス研究と東京大学経済学図書館所蔵の「アダム・スミス文庫」

高　哲男

東京大学経済学図書館が所蔵する「アダム・スミス文庫」（以下、「スミス文庫」）をもっとも頻繁に利用した研究者という理由で「記念オンライン講演会　知の継承（バトン）」に招待されたこともあり、まず講演会でお話ししたとおりに、貴重な資料をどのように私の研究に生かしたかをまとめ、次に時間の都合もあり十分に報告できなかった「スミス文庫」の今後の利用可能性とその条件について、補足しておくことにしたい。

Mizuta 2000（以下『水田カタログ』）には、スミス所有の生物学関係文献として 15 点があげられているが、「スミス文庫」には、その半分以上の 8 点が含まれている。私は初回（2006 年）に Carolus Linnaeus つまり、カール・フォン・リンネ（Carl von Linné）の *Systema naturae*, 12th ed. 3vols. 1767-1770 を、次の年にビュフォン（Georges-Louis Leclerc, comte de Buffon）の *Histoire naturelle générale et particulière*, 1750-81（一部 Daubenton との共著）を利用させてもらった[1]。

当時はまだ学術交流棟（小島ホール）がなく、経済学部図書館（当時）の閲覧事務スペースのデスクで閲覧した。それ迄「スミス文庫」の閲覧は「事実上不可能」と聞いていたので、興奮して終日仕事に没頭した記憶が、いまも鮮明に残っている。小型のラップトップパソコンを持ち込み、眺めながら、タイトルや目次を入力しただけのことだったが。その後数回にわたって、我が国の貴重図書閲覧施設としてはおそらく「もっとも使い勝手が良い」小島ホール（移転後の経済学部資料室）の閲覧室で、その他の文献を何度か閲覧した。撮影可能なものはすべて PDF で公開されているからいつでも閲覧できるとはいえ、原典を眺めながら、あちこち拾い読みができる点で極めて有益である。

その当時、どうしても「スミス文庫」所蔵の文献を閲覧しなければならなかった事情は、以下のとおりである。

私の本格的なアダム・スミス研究は、1990 年頃、『国富論』第 1 編第 11 章「地代について」の内在的理解の試みに始まる。そこで気づいたことは、「地代は価格の原因ではなく、結果である」とか「地代は独占価格である」という独自の主張を支えていたのは、人間をも動物の一員として自然の体系の一構成員と捉えたうえで、人間が食料を入手するための費用としての労働量と、一定量の食料が維持しうる労働量の関係を基礎に組み立てられた価値・価格理論である、という事実である。つまり、小麦やコメのような穀物を一定量生産するために要する労働量よりも、収穫される穀物が維持しうる労働量のほうが「大きい」ということが、経済発展のための絶対的な条件だとスミスは捉えていたのである。「長期的には穀物が、短期的には貨幣が価値の尺度である」という独特の価値尺度論や、新大陸の発見がヨーロッパ農業にもたらした最大の貢献は「ジャガイモとトウモロコシ」であったという注目すべき主張も、このような基本認識の延長線上にある。

このような事実は、自然価格論を中心に進められてきた従来のスミス研究ではほとんど重視されてこなかった点であり、私の関心は、このような独自の主張をもたらした「認識論や方法論」の解明に向かうことになった。

スミス経済学の到達点を自然価格論の確立に求めるのであれば、いわゆる「天文学史」で指摘したニュートンの方法で足りるだろう。だが、生産物の栄養価値まで掘り下げて考察をすすめた背後に、A.ホルト宛ての手紙で、スミス自身が「モノにはならなかった」と回想した『国富論』執筆中の「生物学」の研究があったのではないかと思い始め、没後の 1795 年に出版された『哲学論文集』（水田洋ほか訳、名古屋大学出版会、1993 年）収録の「外部感覚について」（“Of the External Senses”）に注目することになった。

この過程では、『水田カタログ』が不可欠な「資料」になる。インターネットを経由する図書館資料の世界的な検索もかなり容易になっていたし、A.スミス、D.ヒューム、J.ロックなどの全集も CD-ROM 版が利用可能だったから、イギリス思想史研究への本格的な参入が遅かった私には、好都合だったのである。

論文「外部感覚について」の執筆時期については、ごく初期とする通説、B.フランクリンに関する叙述は 1769 年以降でなければならないという指摘（篠原 1986）、「リンネの鳥類の分類における Grallae（シギ類）という「目」の名称やリンネが始めた「哺乳類」という「綱」の分類名の引用からみて、リンネの『自然史』第 10 版が出版された 1758 年以前ではありえない、というブラウンの主張（Brown 1992）があるうえ、I.S.ロスのように「修正され続けた」（スミスの蔵書は 13 版とロスは記すが、多分誤植）という解釈（Ross 2010, p.243）も提出されてきた。

「外部感覚について」はある意味で未完成であるが、きわめて初期の「まだヒュームの理解が不十分な時期」の作品だと断定する通説は論文の前半しか妥当せず、全体としては、ロックとヒュームの素朴な経験論哲学に対する疑問の提起であったことは明らかである。この点は、チェセルデンの白内障手術についての論文を詳しく紹介し、生まれつきの能力である「視覚」でさえ、長い年月をかけて多くの経験をへて習得しない限り、手術によって視覚を回復しても、他の人々と「同じようにみることは難しい」という事実の強調に、明瞭に窺われるところである。

『国富論』執筆中に「ものにはならなかったが、植物学をかなり勉強した」スミスがどのようなものを読んだのかを知る手がかりは、『水田カタログ』で探るほかにない。スミスが著作のなかで言及した生物学者としては、リンネ、ビュフォン、ドバントン（L. Daubenton）、レオミュール（R. Réaumur）などがいるが、ビュフォンに対する評価は必ずしも高くなかった（ビュフォン自身はニュートンの方法に従っている、と主張してやまなかったが）。

私がもっとも注目したのは、「経験と本能」の関係の理解に関するかぎり、ロックやヒュームとはかなり違って、スミスは「生まれつきの本能」の役割を重視し、本能と経験の両方が一緒になって人間本性を作り上げるという『道徳感情論』でやんわりと提起していた論点が、「外部感覚論」の後半部でかなり明確に打ち出されていたことである。つまり、①「鳥の分類」とその性質（生まれて直後から餌を啄むものと、親から口移しでもらうほかにないものとの違い）、②ゼン虫（Worm）の特徴と性質について「目も耳も持たない」ものがいるが、それでも生きるために動き回るという本能への着目であり、その論拠がリンネの *Systema Naturae* の第 10 版（1758）あるいは第 12 版（1766）であった（第 11 版は刊行の事実がない）。

私を悩ませたことは、リンネの *Systema Naturae*

が初版以降きわめて大幅な改訂増補の歴史をもっていたことである。初版は 1735 年（30 頁弱）、第 2 版は 1740 年（約 80 頁）、第 6 版と第 7 版が 1748 年（224 頁、後者には 8 葉の図）、1757 年の第 9 版（本文 227 頁、図）、1758-59 年の第 10 版に至って大拡張され（徹底的な二名法の採用）、I が 823 頁、II が 559 頁へと、1766-1768 年の第 12 版では I が 532 頁、II が 736 頁、III が 236 頁とさらに拡張された。「外部感覚について」の執筆年の確定にかかわるため、どうしてもスミスが用いたリンネの *Systema Naturae* の現物を確認しておく必要があったのである。北海道大学附属図書館にはこの第 12 版のマイクロフィッシュが所蔵されていて、すでにハードコピーを作成して利用していたから、「スミス文庫」所蔵版の利用は最終的なチェックであった。

最終的に、スミスが「外部感覚について」を執筆した理由は、ロックとヒュームの素朴な経験論哲学に対する批判であり、人間や動物は、それぞれ生まれつきもつ本能と経験を通じて入手する知識とが重なり合い、関連しながらそれぞれの行動を形づくるようになるのではないか、という問題提起にあったという結論をえただけでなく、少なくともこの論文の後半部は *Systema Naturae* の第 12 版出版以降であることも確認できた[2)]。

ビュフォンの *Histoire naturelle* についても同じようなことが生じた。そもそもこの初版は 1749-67 年の出版であるが、その後増刷を重ねたことでよく知られている。ビュフォンに対するスミスの批判的言及は 1755-56 年のエディンバラ・レヴューでのことだが、東大のスミス文庫に含まれるもののうち vol.1-3 は 1750 年の版であった。『国富論』では、これは、フランスでは豚肉の価格は牛肉の価格と殆ど同じという判断の典拠（I.xi.l.9）、およびサント・ドミンゴに住む胎生の四足獣で最大のものの名称に関する記述に（IV.vii.a.10）、それぞれ用いられている。

資料室の小島ホールへの移転以降、「スミス文庫」のデジタル化、PDF での公開が実現されたことは、スミスが所蔵していた「版」を確認できる点で、研究者にとっては有意義であると同時に、今後その内容の確認も、研究遂行上の必須の手続きになるだろう。

「スミス文庫」には、生物学関係以外に、ハート（W.Hart）の *Essays on Husbandry*（1770）[3)]などがあって、18 世紀中葉における農業改革、品種改良など、「経済発展」の中身を知るうえで不可欠な情報に満ち溢れているし、さらに、アリオスト（L. Ariosto）やタッソ（T. Tasso）の詩など[4)]、当時ヨーロッパを席巻していたイタリア・オペラの台本として利用されたものが多数含まれている。啓蒙期の社会思想家のなかで、なぜスミスが（多分、スミスだけが）ダーウィン以降の「現代科学」と矛盾しないような科学方法論を提起できたか、このような問題を考察する場合には、『水田カタログ』と「スミス文庫」にしか存在しない *A Catalogue of Books Belonging to Adam Smith,1781*（筆耕の手になる 87 頁の手稿本で PDF あり。以下、*Catalogue 1781*）[5)]の立ち入った検討が不可欠になる。

幸いなことに、後者は Yanaihara 1951 として刊行されている。それを見れば、書架ごと、棚ごとの配架状態が分かっているから、書架が部屋のどこに置かれていたかが分かれば、有意義な特徴が浮かび上がってくる可能性もあろう。しかしアダム・スミスが住んでいたキャノンゲートの Panmure House は、残存してはいるが、内部はすっかり改修されているから、実際にはまず無理である。

だが、注目に値する事実もある。1781 年の蔵書は、「一応、分類はされているが、分類の基準が必ずしも明確ではない」印象を受ける。たとえば、生物学関係の図書は Left Hand Book Case の Shelf 4th に 7 点ほどまとまっているが、ビュフォンの *Histoire naturelle* はニュートンの著作や数学、天

文学などと同じ別の Shelf に配置されている。

さらに、ハチソン（F. Hutcheson）の *An Enquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue* と *An Essay on the Nature & Conduct of Passions & Affections* は、カドワース（R. Cudworths）の *A Treatise Concerning Eternal and Immutable Morality*、J.ロックの *Essay Concerning Human Understanding*、D.ヒュームの *A Treatise of Human Nature*（3 vols）、スミスの『道徳感情論』（*The Theory of Moral Sentiments*）、リード（T. Reid）の *Enquiry into the Human mind: on the Principles of Common Sense* などと同じ Shelf に配置されているが、*A Short Introduction to Moral Philosophy, in three books* や *Ethica Hutchesoni* つまり *Philosophiae moralis institutio compendiaria, ethices & jurisprudentiae naturalis elementa continens* は、ホッブス（T. Hobbes）の *Elementa philosophica de Cive* などと一緒に Right Hand Book Case の Shelf 1st に配架されており、決して著者別にまとめて配架されているわけではない。内容、つまりスミス自身の関心に従って配架されているとみるべきであろう。

ちなみにホッブスの *Leviathan* は、Right Hand Window Book Case の Shelf 2nd に、プーフェンドルフ（S. Puffendorf）の *Le Droit de la Nature* やハチソンの *System of Moral Philosophy*（2vols）、スミスの『国富論』二部やステュアート（Sir J. Steuart）の『原理』（*An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*）と一緒に配架されている。

スミスの『国富論』とステュアートの『原理』が並んで置かれていたというのは興味深いことだが、これとは別に、もう一点指摘しておくべきことがある。おそらく上記二部の『国富論』と『原理』は、*Catalogue 1781* の Sheet 3 では、いったん記載の位置に配置されていたが、のちに Right Hand Window Book Case の Shelf 1st（Sheet 78）に移した方がよいと判断されて再度記載されたようで、結果的に Sheet 3 の記載に×印がつけられた、と推測できる。そもそも Sheet 3 には「歴史」に属する書籍が配架されていたからである。

スミスがカーコーディからキャノンゲートの Panmure House に転居したのは関税委員着任後の 1778 年初頭のことで、1782 年 3 月から 4 カ月間休暇をとってロンドンで過ごしている。この間「新しい書物、保有する旧版の新版、存在そのものを知らなかった版などを、余暇の楽しみと『国富論』の改訂新版のために購入した」と、版元 T.Cadell あての手紙で書いている。実際 1784 年 11 月に『国富論』の大幅な増補改訂版が発行された点を考慮すると、*Catalogue 1781* は、保有するすべての書物をその配架場所とあわせてリストアップし、今後の作業に役立てるため、一種の備忘録として作成された可能性が浮上する。*Catalogue 1781* における簡略化された著者名や書名の表記も、スミスには、それで十分だったはずである。

とはいえ、これはあくまでも推測である。しかし *Catalogue 1781* は、立ち入って詳しく分析することにより新しい情報、つまりスミス自身が先人の業績を「どのように分類していたか」の解明をつうじて、スミス自身が抱いていた「学問の体系」を推測する具体的な手掛かりの確保につながることは、間違いない。もっとも、このような未開拓の課題を遂行するためには、スミスが作成した *Catalogue 1781* を収録している Yanaihara 1951 の内容を、『水田カタログ』を参考にしながら「より正確に、分かりやすく」編集し直し、PDF で公開することが要請されよう。これまた、世界で唯一の「資料」を保管する東京大学経済学図書館に固有の使命の一つであろうが。

参考文献

Brown, Kevin L. 1992. “Dating Adam Smith's Essay “Of the External Senses”, *Journal of the History of*

Ideas, 53, pp. 333-337

Mizuta, Hiroshi. 2000. *Adam Smith's Library: A Catalogue.* Clarendon Press

Ross, Ian Simpson. 2010. *The Life of Adam Smith*, Second ed. Oxford University Press

Yanaihara, Tadao. 1951. *A full and detailed catalogue of books which belonged to Adam Smith : now in the possession of the Faculty of Economics, University of Tokyo, with notes and explanations* 岩波書店

篠原久 1986『アダム・スミスと常識哲学 : スコットランド啓蒙思想の研究』有斐閣

（たか　てつお：九州大学名誉教授）

---

1) 請求記号はそれぞれ、アダムスミス:83:1～4、アダムスミス:17:1～3。

2) 詳細については、高哲男「アダム・スミスにおける本能の概念化と経済学の生物学的基礎」神奈川大学『商経論叢』43-1、2007 年および高哲男『アダム・スミス―競争と共感、そして自由な社会へ』講談社選書メチエ、2017 年を参照願いたい。

3) 請求記号はアダムスミス:52。

4) アリオストの *Orlando furioso*. 請求記号はアダムスミス:8:1～4、アダムスミス:99:18～22。タッソの *La Gierusalemme liberata*. 請求記号はアダムスミス:99:28～29、アダムスミス:132:1～2、アダムスミス:133:1～2。

5) 請求記号はアダムスミス:121。